

要点録

会議名	令和5年度多摩市地域福祉計画推進市民委員会（第2回）
日 時	令和5年12月19日（火）午前10時15分～正午
場 所	多摩市役所西第1・第2会議室
出席者	【委員】室田委員、鈴木委員、小山委員、千葉委員、中村委員、川辺委員、澤委員 【事務局】伊藤健康福祉部長、松崎福祉総務課長、川添福祉総務担当係長、海老澤主事
欠席者	荒井委員
次第	1. 前回委員会の振り返り 2. 多摩市地域福祉計画 今後のスケジュール 3. 評価のグランドデザイン・評価部会での議論の内容 4. その他
会議内容	
事務局	1. 前回委員会の振り返り 資料2に沿って説明
委員	評価方法の見直しについて、現在の案であると、令和11年度からの本格導入となることだが、より早めに実施すべきではないか。
事務局	来年度評価部会を実施し、令和8年度からの中間見直しにおいて実質開始していき、令和11年度からの改定において本格導入する予定。
委員	全庁的な開始が難しいようであれば、導入できるところからスタートしていき、他のところにも導入していくことも検討してもらいたい。
委員	前回の意見の中で、「相互に情報の発信を行うこと」とあるが、相互とは誰を意味するのか。行政と市民という理解でよいか。
事務局	市から発信するとともに、実際に活動している市民からも発信をすることが大事との意見をいただいた。
委員	評価部会を年2回とあるが、評価部会を単体で年2回実施するという理解でよいか。
事務局	評価部会を単体で2回実施する。評価部会では、評価方法のみについて議論を行う。部会での意見を委員会で確認する予定。また、メンバーを絞って実施していく想定。
事務局	2. 多摩市地域福祉計画 今後のスケジュール 資料3～5に沿って説明
委員	このようにスケジュールを整理していくことは重要。
委員	予算編成が9月から始まるとのことだが、何か考慮すべきことはあるか。

事務局	アンケート実施は予算事項であるが、評価部会については予算を確保した上で進めていくため、特段ないと考えている。
委員	<p>地域福祉活動計画では住民活動計画であり、計画において 6 年後の姿を掲げ、住民にお願いしたい取組も記載しているが、実際の取組状況の評価については、難しい課題。</p> <p>従来の組織計画であれば、取組、成果、課題を評価していくことは可能だが、住民の取組状況を数値的に測定することや評価項目の抽出は難しく、検討しているところ。</p> <p>市と連携を取りながら検討していきたい。</p>
委員	<p>地域福祉計画については、庁内の各部署の事業を地域福祉の枠組みで見直していくことが重要である中、従来はアウトプットベースであったところ、アウトカムベースに見直していく。これにより、地域福祉計画で目指すものにどのように結びついているかを測っていくことになる。</p> <p>社協の地域福祉活動計画における評価との連携も重要になると考える。</p>
委員	<p>一住民としては、評価をどのようにしていくかは難しい。</p> <p>客観的に評価を行うことに長けている方に評価部会の委員を務めていただくことが好ましいのではないか。</p>
事務局	人選については、今後個別に調整させていただきたい。
委員	<p>現場で活動していると、行政にこう動いてもらいたい等の考えがあると思う。</p> <p>市民側の立場で感じていることについて、現場レベルでも変えていくことはできると思うが、計画上の枠組みとして決めることで、現場レベルの不都合が解消していくこともでき得る。</p> <p>現場での問題点等について、ぜひご意見いただきたい。</p>
委員	<p>地域福祉を評価することは、ほぼ日本で実施されていない。その中で、初めから順調にいくかは不明であるため、少しずつスタートして改善していくしかないと考えている。</p> <p>教育学や経済学においても、最近になって評価の考え方が出てきている。社会福祉学についても、評価について学術レベルでもそれほど進んでいないため、データがどこまで出てくるか、大きな負担もあるのではないか。</p> <p>重要なことはデータより、市民にとって何が大事なのか、データを出して何に使われるのかである。</p>
事務局	<p>定量的な評価は常に求められているところが、例えば、ひきこもりの方を 10 回訪問して、11 回目に外出し、就労に至った等を量的に評価することは難しく、評価として妥当かどうかは非常に難しい。</p> <p>例えばどういった項目であれば評価に馴染むか、市民目線でどのように評価していくべきか、評価部会等で議論していきたい。</p>
委員	よくある例として、要介護認定率が低いほど元気高齢者が多いとみることも可能だが、実際は利用控えをしていることも考えられる。数値からは測れないこともあるため、数値のみで評価することは危険。現場での感覚を共有することが必要で、よりよい評価につながるのではないか。

事務局	ノルマのようになると危険。そもそも定量的な評価が設定しづらい中、福祉分野は特に量的な評価が難しい。
事務局	計画策定の中では、地域福祉の実情の捉え方が難しいと感じた。 例えば、シルバー人材センターの登録者数が多いことは、元気な高齢者が多く地域活動への参加につながっていると捉えられるが、年金のみでは生活していくという側面もある。 ゴールは計画の評価ではなく、市民生活の向上であることは常に念頭に置いていく。
事務局	3. 評価のグランドデザイン・評価部会での議論の内容 資料 6 に沿って説明
委員長	何をやるかも大事だが、結果として市民の生活にどのような影響を与えたかが重要。
委員	実態を把握しない中で、計画を進めていくことはできないため、アンケートや市民の意見は多く取り入れる方がよいと思う。また、目標数値だけでなく、結果をしっかりと管理していくべき。
委員長	結果を管理する上で、数値が上昇するだけでなく、下降した場合、何をすべきかがより見えてくる。こうしたモニタリングを通じて、次期計画を策定していく、連続的に進捗管理していくことが大事。
委員	評価を通して、職員のモチベーションをあげられるとよいのではないか。 評価が何につながっているのかを明確にし、単なる査定で終わらないことが重要。 職員が市民に目を向けないと、査定でとどまってしまう。
委員長	やっていることを評価するという視点ではなく、何をやっていくべきかを考えるための材料となることが大事。
事務局	モチベーションの観点では、評価が見えると、地域福祉に関わる方の好循環を生み出すことが出来るのではないかと考えている。
事務局	4. その他 次回委員会は改めて調整させていただく。 来年度は評価部会を設置するが、委員やスケジュールについては個別に調整させていただく。 メンバーは今年度中に確定し、皆様に共有する。

以上